TOPICS

第72回香川大学祭をオンラインで開催 11/23

第72回香川大学祭を、初めてインターネットを通じてオンラインで開催。
今年は新型コロナウイルスの影響で、例年のような大学生活を送ることができなかったため、この大学祭が、新しいライフスタイルの第一歩となってほしいという想いを込めて、今年のテーマを「NEO~New Era Odyssey~」としました。当日は、大喜利、サークル・プロジェクト活動発表、大学祭実行委員会サークル連合H.O.P.主催によるミスキャンパスコレクション等の様子をFM香川と連携し、ラジオとSNSで同時生配信しました。
11月23日現在でYouTube再生回数10,355回、Twitter視聴者数1,072人、Facebook再生回数582回と、多くの方に視聴いただき、配信中にも視聴者から応援コメントをいただきました。また、参加した学生からも、「やって良かった。発表の場を与えてくれて感謝している。自分たちの代で大学祭を途切れさせることなく後輩に繋げられて嬉しい。」等の反響がありました。
コロナ禍での開催ではありましたが、協賛企業や地域の皆さまのお力添えをいただき、学生が主体となって無事に大学祭を開催することができました。

香川大学オンライン大学祭 YouTube

筧学長による開会宣言

屋外サテライトスタジオ

モーリー・ロバートソン氏をお招きして、キャリア支援特別授業を開催 11/18

「モーリー流　世界の動きとこれからの日本」というグローバルなテーマで開催。コメンテーターやテレビタレントの他にもDJやミュージシャンなど幅広く活躍されていることもあり、様々な題材と切り口での興味深い講演となりました。本場のスタンダップコメディと見間違うほどスピーディかつユニークで風刺の効いた語り口で、アメリカ大統領選というタイムリーな話題に始まり、ご自身の生い立ちや、社会に出るまでに必要な経験とスキルなどが熱く語られました。「要領よく物事を進めるより、放浪した方が良い」というメッセージは学生たちにも強く刺さったようで、固唾を呑んで見守るような緊張した時間となり、まさに真剣勝負の60分でした。講演後の質疑応答では立て続けに学生の手が上がり、一つひとつに丁寧な回答をしてくださり、盛大な拍手の中で講演会は終了しました。

モーリー・ロバートソン氏

「STI for SDGs」アワード・科学技術振興機構理事長賞を原量宏特任教授及び徳田雅明副学長が受賞

「STI for SDGs」アワードは、科学技術イノベーションを用いて社会課題を解決する地域における優れた取り組みを表彰することで、当該取り組みのさらなる発展や同様の社会課題を抱える地域への水平展開を促し、もって持続可能な開発目標の達成に貢献することを目的として、JSTが創設。第２回目となる今年度は35件の応募があり、文部科学大臣賞１件、科学技術振興機構理事長賞１件、優秀賞２件の取組みが受賞しました。
今回受賞となった「超小型モバイル胎児モニターを用いて安心・安全な妊娠・分娩を実現する」取り組みは、原特任教授が中心となり開発した小型軽量化したモバイル胎児モニターを用いた点が、STIの活用や革新性において高く評価されました。また、本システムの水平展開において、国内の離島やへき地など産科医不足の地域のみならず、徳田副学長らが牽引して、タイ、インドネシア、ミャンマー、ブータンなど海外6カ国ですでに導入し、世界の医療格差の解消に積極的に貢献しようとしている点が、「誰一人取り残さない」というSDGsの精神に沿う取り組みであるとして、選考委員会において科学技術振興機構理事長賞にふさわしいと判断されました。今後は国内外で産科医が不足している地域や救急車両での妊婦の搬送時への導入や、香川大学でも既に活用している新型コロナウィルス感染症蔓延状況下での妊婦のコントロールなどに拡大することを目指しています。

学長報告　左から筧学長、原特任教授、徳田副学長

香川大学　KADAIGEST　2020年12月発行　香川大学広報室　soumkot@kagawa-u.ac.jp　香川大学HP　https://www.kagawa-u.ac.jp/

香川大学広報紙「カダイジェスト」

KADAIGEST 2020 12

今年の香川大学オンライン大学祭で、ダンス部と一緒にオープニングを飾りました　曲は「 OH HAPPY DAY 」

今年の定期演奏会はオンラインです　乞うご期待！

青空の下、中央公園のステージへ！

ステップの練習、歌いながらステップ踏むのは難しい

令和元年度全日本合唱コンクール四国大会で金賞受賞

一年生で合唱の練習

新入生歓迎祭ではＪ-ＰＯＰを披露

老人ホームで劇を披露後、みんなでポーズ !!

香川大学 合唱団

「行ってみようか・・・」
これは大学一年生のとき、415教室前で呟いた私の独り言です。合唱団は団員数40人の大所帯で、ユニークで個性的な先輩ばかりでした。そんな中で私の入団するきっかけになった先輩が一人いました。私は、この人と大学生活を過ごしたい！絶対楽しい！という、ただそれだけで合唱団への入団を決めました。それから団員としてたくさんの行事に参加し、ステージに立ちました。私にはたった一人の先輩がいただけだったのが、自然と合唱のことも好きになりました。意外だと思われるかもしれませんが、当団は全体の７割が初心者です。合唱団に入ってから合唱のことを好きになればいいし、楽しむことができれば良いのです。香川大学合唱団は「合唱を楽しむこと」をモットーに日々練習しています。好きこそ歌の上手なれ、です。(笑)

合唱団の魅力は何ですかと訊かれて、楽しさの次に頭に浮かぶのはストイックさです。普段はワイワイしていますが、コンクール前には目の色が変わります。来年もまた、コンクール四国大会での金賞を目標に練習をします。大学生活を充実させたい人、何か一つに打ち込みたい人、面白い先輩と出会いたい人、大歓迎です！私はあの時、勇気を出して415教室に入って本当によかったと感じています。

活動場所・学内の教室、ホールetc.
活動時間・週3回（月・木19時～、土10時～）
部員数　・40人
Twitter/@chorus_u_kagawa
Instagram/@kadaichorus

サークル歴3年
法学部3年
萩尾優花

VOICE 日本各地を繋ぐ「大漁旗プロジェクト」高松市の魅力とビジョンを描く

テーマは「未来を創造する 過去から未来へ信念のバトンを繋ぎ、世界が驚く「創造都市・高松」へと突き進む」

「大漁旗プロジェクト」は、東京大学生産技術研究所設立70周年記念事業「科学自然都市協創連合設立記念事業」として実施されたSDGsと最先端の科学・技術の視点で「まちづくり」を捉えなおす機運を全国で高めることを目的に、日本各地が誇る魅力とビジョンを描いた大漁旗を地域ごとに制作するプロジェクトです。今回は創造工学部造形メディアデザインコースの学生６名と地元の高校生2名のチームで制作しました。私自身高松で過ごした時間は約1年と短いですが、自分の住んでいるこの街を盛り上げたいという気持ちを持ってこのプロジェクトに参加しました。

この大漁旗を制作するための最初の作業として、高松という町の文化や産業を徹底的に調べ上げ、その図柄を収集しました。高松の持つ要素は想像以上に多く、大漁旗に載せるものを厳選する作業は大変でした。その甲斐もあって大漁旗には高松の魅力をふんだんに盛り込むことができたと自負しています。

大漁旗の制作はテーマ設定や構図の決定、下絵やデータ化といったいくつかの工程に分かれており、メンバーがそれぞれの得意分野を活かして完成を目指す、といった形をとりました。それ故に自分が担当する領域には必ず責任が伴い、作品のためにもチームのためにも「やり遂げる」ことの重要性を学びました。結果として技術面や精神面の成長にもつながり、自分のためにもなったと感じています。

私たちが制作した大漁旗は今後日本沿岸を渡航する船に託され、各地を回ります。昨今は新型コロナウイルスの感染拡大などといった暗い話題が目立ちますが、今回の大漁旗が人々や町が活気を取り戻すための足掛かりとなってくれれば嬉しいです。

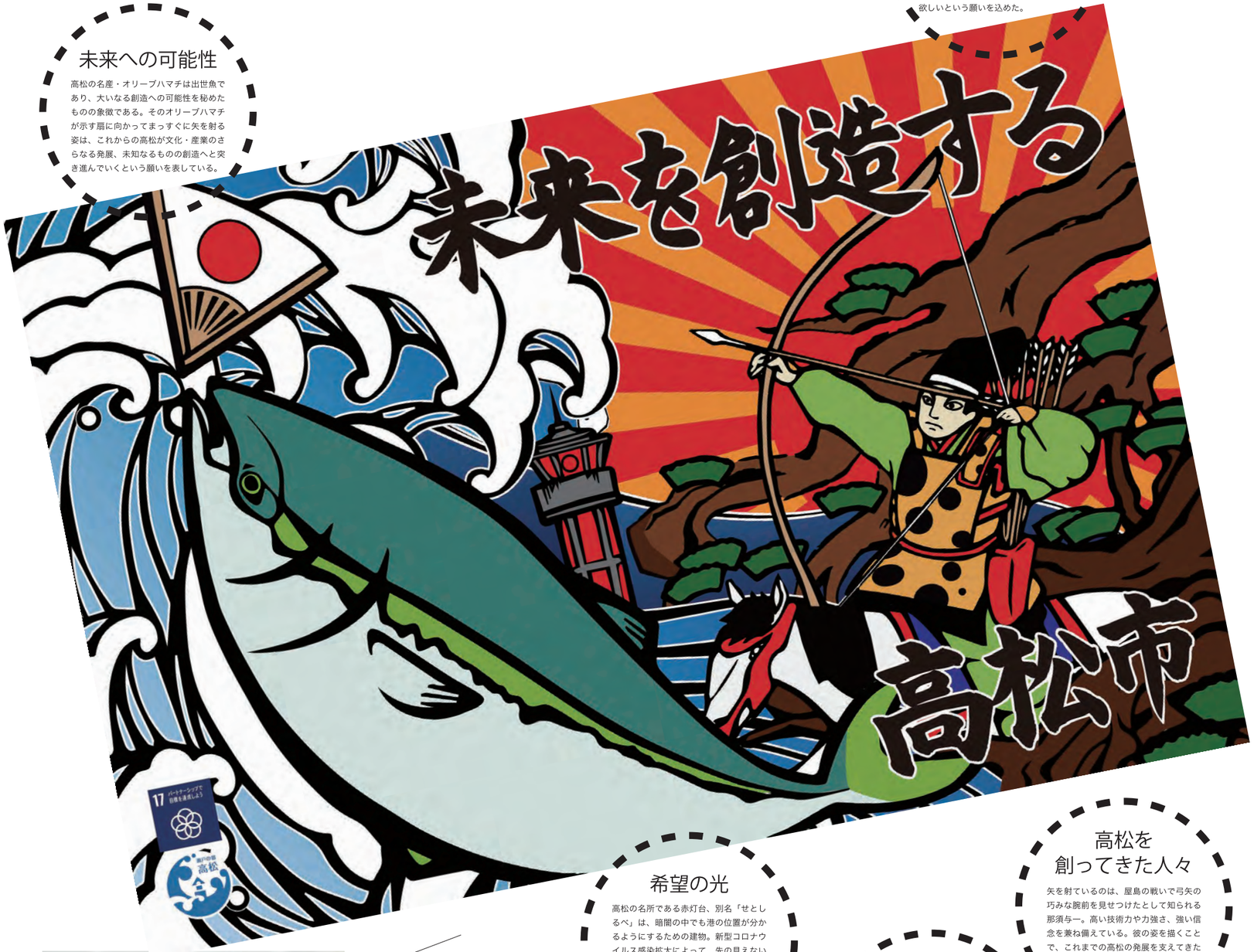
創造工学部 2年　高瀬 凛

高松は世界へ

松の花言葉は「不老長寿」や「向上心」。その長い生涯の中で大きく力強く成長していく様子からつけられた。大漁旗には、高松の象徴である黒松が段々と海に変化していく様子を描いている。これには、高松が黒松のように大きく成長し、その発展がやがて世界へと広がって欲しいという願いを込めた。

未来への可能性

高松の名産・オリーブハマチは出世魚であり、大いなる創造への可能性を秘めたものの象徴である。そのオリーブハマチが示す扇に向かってまっすぐに矢を射る姿は、これからの高松が文化・産業のさらなる発展、未知なるものの創造へと突き進んでいくという願いを表している。



希望の光

高松の名所である赤灯台、別名「せとしるべ」は、暗闇の中でも港の位置が分かるようにするための建物。新型コロナウイルス感染拡大によって、先の見えない不安な日々が続いている。そんな今だからこそ、高松が人々にとっての希望の光になるという思いを込めた。

高松を創ってきた人々

矢を射ているのは、屋島の戦いで弓矢の巧みな腕前を見せつけたとして知られる那須与一。高い技術力や力強さ、強い信念を兼ね備えている。彼の姿を描くことで、これまでの高松の発展を支えてきた先人たちの偉大さを表した。

アートが持つ力

与一が纏う鎧には、みなさんご存知、草間彌生のあの模様。瀬戸内国際芸術祭を筆頭に、高松とアートは切っても切れない関係にある。アートは高松の発展に深く関わる一要素であり、その力は「創造都市」を目指していくためにも必要不可欠であるという思いを込めた。

私たちが制作しました

香川大学×高校生　大漁旗制作チーム
▷創造工学部造形･メディアデザインコース
２年 蘆原渚咲　高瀬凛　　１年 入屋早紀　川﨑葉月　西尾優希　茂中遥
▷高松東高校３年　西尾幸汰朗　　▷高松工芸高校２年　伊澤紗弥

1 テーマの検討・決定

高松市基本構想をもとにディスカッションし、高松市の大漁旗にふさわしいテーマについて検討。

2 高松にゆかりのある図柄集め

高松を代表する文化・産業の図柄を収集。

3 高校生と大学生による高松の未来についての図案作り

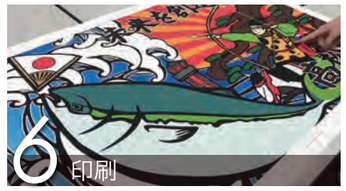
高校生と大学生がディスカッションし、大漁旗で表現する高松の未来を創造する物語を考え、そこからイメージする図案を出し合った。たくさんの物語の中から、未来を射抜く与一の図案に決まった。

4 図案のブラッシュアップ

図案の構図を何度も検討し、図案を作成。

5 配色

大漁旗の華やかでめでたい色合いを検討し、色付けを行った。



6 印刷

A0サイズの紙に印刷をし配色や配置の最終確認を行った。